内湖再生全体ビジョン（案）の概要

～価値の再発見から始まる内湖機能の再生～

現状と課題

内湖の価値を暮らしに利用

○内湖利用の歴史

古代～中世　漁場、港、周辺には城下町等として

～近代　排水の放流先、漁業など生業の場として

底泥、水草・・・肥料として利用

ヨシ・・・屋根材、よしずとして利用

現代　＝　暮らしの中で内湖の価値が低下

⇒ 開発による内湖の消失や機能の低下

「内湖の価値」

①自然環境・生態系としての価値

（琵琶湖の生態系を支え、生物多様性を維持する）

②緩衝地帯としての価値

（波浪等を穏やかに保ち、流域からの水や負荷を留める）

③人の暮らしを支える価値

（水源、生業の場、景観・文化の一部、レクリエーションの場）

＜内湖の特徴＞

・琵琶湖とつながっている（生物等の移動が可能）

⇒琵琶湖と内湖は密接に関係し合う1つの系（水域）

・琵琶湖全体のおよそ60%ものヨシ等抽水植物が生育

⇒在来魚類の重要な産卵・繁殖場

・里山型の二次的自然、いわば「里湖」

⇒人の手が適度に加わることで、その存在の維持が可能

価値の再発見から始まる内湖機能の再生

○現れている問題

・在来魚介類の減少をはじめとする琵琶湖生態系への影響

・汚濁負荷の直接流入など琵琶湖水質への影響

・ふなずしやヨシ葺き屋根、よしずの利用の減少など内湖と人とが育んだ生活文化への影響

内湖の再生に向けて

＜ビジョン1＞ 基本理念

「内湖の価値を再発見し、その本来の機能を再生し、琵琶湖や人とのつながりをつくる内湖づくり」

＜ビジョン2＞ 基本方針　次の三つの価値を重視し、その機能を再生する。

①自然環境・生態系としての価値　②緩衝地帯としての価値　③人の暮らしを支える価値

＜ビジョン3＞ 特に重視すべき価値　「琵琶湖流域の生態系を支える価値」

（ステップ1：価値の再発見）人の暮らしの場での内湖の価値を見つけ、人と内湖の関わりを再生する

（ステップ2：機能の再生）　琵琶湖～内湖～集水域の物理的な場のつながりを確保する

（ステップ3：成果の現れ）　内湖の価値が高まり、琵琶湖の在来魚介類のにぎわいがよみがえる

＜ビジョン4＞ 内湖再生の全体としての目標（目標年度2020年）※マザーレイク21計画「内湖再生プロジェクト」と整合

「内湖を再生することにより、在来魚や希少動植物など豊かな生態系を回復するとともに、暮らしを湖に近づけ、琵琶湖と人とのより良い関係を築き、地域資源を活用した社会成長を目指します」

内湖再生のイメージ

・ハード的、ソフト的な対策
・地域等との関わり

⇒

・順応的な管理手法
・住民・関係者参加のデザイン

既存内湖

農村型コミュニティを背景に、人と人、人と内湖、生きもののつながりを取り戻す

◎主な対策メニュー

○魚類移動の連続性の確保
魚道の設置等

○体験型環境学習の取組等
自然観察会の実施　等

新規内湖

人々の憩いの場、南湖における在来魚の産卵、生育の場としての価値を高める

◎主な対策メニュー

○内湖と触れ合う
親水施設の整備等

○在来魚類の産卵の場となる基盤整備
緩傾斜護岸化、ヨシの植栽
水草の刈取　等

消失内湖

内湖の再生やクリークなど残された水域の内湖的機能を高め、地域とのつながりを再生する

◎主な対策メニュー

○早崎内湖(20ha)の再生

○内湖的な機能の再生
ヨシの植栽、魚類の放流等

○内湖（水辺）との関わりが復活する等
自然観察会の実施　等

○内湖再生に向けた課題（4つのハードル）

①地域特性を踏まえた価値の再発見　②財源の確保　③制度上・技術上の課題　④持続的な取組の仕組み

地域主体で進める各内湖の再生に向けた取組